

## 発刊にあたって

氣多 雅子

このたび京都大学大学院文学研究科宗教学専修から、紀要を発刊することにいたしました。当専修は、宗教学の中でも、伝統的に宗教哲学を中心としていますが、この分野における若手研究者たちの研究のスタイルが近年、あまりに定式化してきたように思われます。大学院の制度の改革によって、博士論文という形で早い時期にまとまった研究をする必要がでてきましたが、宗教哲学は研究の基礎を習得するのに時間のかかる分野です。そのため、ある一人の哲学者の著作に的を絞る、その専門的な研究に専念するというスタイルが一般に定着しています。

そのような研究の仕方にはもちろんメリットもありますが、デメリットもあるように思います。宗教哲学においては、研究者がどこにおいて思索するかということが根本的に重要な意味をもちますが、その「どこにおいて」ということを的確に把握するには、研究の裾野を大きく広げる必要があります。それには、さまざま研究分野の幅広い知識をもつというだけでなく、現代世界の問題状況についての深い関心が必要です。近年、宗教哲学の研究が閉鎖的になっているという批判を耳にしますが、それはこのような研究の仕方のデメリットが表れてきているという指摘だと思われます。

この紀要は、専門的な研究論文の他に、そのような幅広い関心に基づく論文を掲載する場にしたいと考えます。この場を利用して、さまざまな角度から若手研究者の思考が鍛えられることを願っています。

なお、この紀要は電子ジャーナルの形で刊行します。まだ哲学や宗教学の分野では先進的な試みですが、より柔軟性の高い刊行の仕方が可能になるのではないかと考えています。

2004年6月